INTERVIEW
404人目
上

千人回峰

心に響く人生の匠たち

「千人回峰」というタイトルは、比叡山の峰々を千日かけて駆け巡り、悟りを開く天台宗の荒行「千日回峰」から拝借したものです。千人の方々とお会いして、その哲学・行動の深淵に触れたいと願い、この連載を続けています。

中瀬幸子

Sachiko Nakase

Avintonジャパン
代表取締役



自分にしかできない仕事を求め経営&教育者の道を選ぶ

中瀬幸子さんはIT企業の創業経営者であるとともに、9歳の男の子と7歳の女の子を育てるお母さんでもある。お話をうかがっていると、私も1児の母としても参考になるところがあり、子育て論も大いに盛り上がった。ちなみに中瀬家では、PCはOKだが、テレビ、スマートフォン、ゲームはNGとのこと。朝は読書、週末は5キロマラソンと、能動的に頭と体を動かしている。その甲斐あって、お子さんたちは「ゲームよりも山登りが好き」と言うそうだ。

（本紙主幹・奥田芳恵）

両親や祖母の働く姿が仕事に対する体力、精神力を形成

奥田　中瀬さんのプロフィールを拝見していると、20代で会社設立・経営を経験され、とてもパワフルにビジネス人生を歩まれてきたように感じます。まず、そこにはどのようなバックボーンがあるのか、どんな幼少期を過ごされたのか教えていただけますか。

中瀬　私は、立山連峰と富山湾を望む富山県の漁師町で育ちました。父は大手企業の営業マンでしたが、土日も働くようなとても仕事熱心な人でした。そんな父の姿を見てかっこいいと思い、それがその後、私が営業職に就いたことにつながっているのだと思いますね。そして母は、障害者支援施設・グループホームで介護や生活支援業務に携わって、その施設長を務めており、たびたび夜勤もこなしながら私たちを育ててくれました。

奥田　そうしたお父さま、お母さまが懸命に働く姿を見ながら、中瀬さんは育ったのですね。

中瀬　それから、祖母も家の隣りで段ボール工場を経営しており、朝早くから深夜まで仕事をしていました。ですから、私にとって一生懸命働くということは、幼い頃から生活の延長にあるものだったのです。

奥田　そうした家庭環境が、中瀬さんの価値観や仕事観に大きな影響を与えたのでしょうね。

中瀬　そうですね。仕事に対する体力や精神力が、自分の中に育ったことは確かですね。

奥田　高校時代は、どんな生徒でしたか。

中瀬　私が通ったのは試験の点数だけで評価されるような田舎の進学校で、アルバイトは禁止だったんです。でも、私は社会との接点を持ちたくて、こっそりアルバイトをしていました。そこで得たものは大きかったですね。学校ではただ偉そうにしている教師に腹を立て、試験の点数なんかどうでもいい、そんなもので自分を測られたくないと思っていました。

奥田　その頃から、自分の意志をしっかり持っていらしたのですね。

中瀬　でも、そんな田舎から出たくて仕方なかったので、東京の大学に進むための受験勉強は



PROFILE 1986年、富山県魚津市生まれ。大学卒業後、富士ゼロックス（現富士フイルムビジネスイノベーション）で法人営業に従事。2010年、Avintonジャパンをスタートし、AI・ビッグデータ・ITコンサルティングを通じて企業のDXを支援。これまで30カ国以上からの社員とともに事業を展開している。また、文部科学省「専修学校理系転換等推進事業」の推進委員を務めるほか、大学での講義や企業・自治体向けの講演・研修を通じて、AIとともに考え、学び続ける人材と組織の育成に取り組んでいる。

構成／小林茂樹
text by Shigeki Kobayashi
撮影／長谷川博一
photo by Hirokazu Hasegawa
2026.10.7／東京都千代田区のBCNにて

ランニングウォッチとイヤホン

中瀬さんのお気に入りは、HUAWEIのランニングウォッチと外の音も聞こえる骨伝導方式のイヤホン。これを装着して、2人のお子さんたちと一緒に週に1、2回、横浜の街を毎回2～5キロメートル走っているそうだ。



しました。当時から世界でビジネスをしたいという思いが芽生えていたようで、私自身は覚えていないのですが、あるとき母から「さっちゃんは、中学生のときからグローバルで稼ぐと言っていた」と聞かされました。

奥田　そんなに早く、世界というものを意識されていたのですね。ということは、大学に入ったら目標に向けてまっしぐらですか。

中瀬　ようやく保守的な空気の強い田舎から解放されて、はじめのうちは遊びほうけていましたね。でもしばらくして、このままではいけないと思うようになり、たまたま人生で一番のターニングポイントに出会ったのです。

マニラの貧民街で目覚めた世界への思い

奥田　人生で一番のターニングポイントですか。

中瀬　大学3年のとき、フィリピンに行き、3週間、ボランティア活動を含むプログラムに参加したことです。かつてマニラ市内にスモーキーマウンテンという巨大なゴミの山があり、そこで廃品回収によって生活する親のいない貧しい子どもたちの中に入って一緒に遊んだりしました。生活状況を調査するプログラムだったのですが、それを見て、自分は頑張らないと恥ずかしいと心底感じ、これをきっかけに覚醒したんです。

奥田　覚醒ですか。具体的には、どのように変わったのでしょうか。

中瀬　あのとき衝撃を受けたのは、生まれた環境によって、人生の選択肢がこんなにも異なるものかということでした。私は日本に生まれ、教育を受け、海外に行くこともできる。それなのに、自分には何もできないと思って、行動していなかったんです。環境を変えることは簡単ではありませんが、自分には挑戦する選択肢がある。それに気付いたことが、私の人生を大きく変えました。この後、いろいろなインターンシップに申し込んだり、猛烈に英語を勉強してニュージーランドに留学し、TOEICもほぼ満点を取ったりしました。

奥田　それまで英語は？

中瀬　大学受験の英語ぐらいです。

奥田　なぜ、英語だったのでしょうか。

中瀬　当時、私は世界銀行を見学させていただいたこともあるのですが、自分とそれほど年齢が変わらない日本人が、世界を舞台にそうした社会課題を解決する国際機関で働いているのを目の当たりにして、自分にもそれは不可能ではないと感じました。それで「まずは英語だな」と思い留学したり、バックパッカーとして世界を回ったりして、英語を身に付けたわけです。

奥田　そして卒業後は、富士ゼロックス（現富士フイルムビジネスイノベーション）に入社されるわけですが、こちらでのお仕事はいかがでしたか。

中瀬　子どもの頃、両親や祖母が朝から晩まで働きづめだったのを見ていたためか、すごく意気込んで入社したんです。始発で出社して終電で帰るぞみたいな（笑）。でも想像とはまったく違って、頻繁に社内の人と飲み会に出なければいけない。「仕事じゃなくて飲み会なんですか」と思いつつ、これまで経験したことのない世界だったので、お酌をするのもそれはそれで楽しかったのです。でも、やはり違うなと。

奥田　ご自身が考える「仕事」の概念とは、だいぶ落差があったということですか。

中瀬　自分が仕事をしている、自分が働いている、自分が貢献している、自分にしかできないことをやっている、という感覚がまったくないので、やはり違うと感じました。人間関係を含めて職場にはすごく満足していたのですが、育ってきた環境から価値観が異なることに気付き、「自分でやりたい」という気持ちが強まっていきました。

奥田　ずっと、起業したいとか、お金を稼ぎたいという思いをお持ちだったのでしょうか。

中瀬　いいえ、自分にはそういう思いはありませんでした。今でも経営者なのに、お金には無頓着なほうですし。

奥田　では、なぜ起業に踏み切れたのでしょうか。

中瀬　大学時代に知り合ったエンジニアの人たちから、一緒に会社をつくろうとずっと言われていたんです。ただ、日本で大企業に就職できるチャンスはほぼ新卒時だけという空気があり、とりあえず「就職させてくれ」と待ってもらっていた経緯があります。

奥田　富士ゼロックスに3年間在籍されて起業に踏み切るわけですが、このときはどんな状況でしたか。

中瀬　実は2年目に決断して会社を辞めようとしたのですが、なかなか辞めさせてくれませんでした。そのため平日は会社で働き、土日には起業するメンバーと一緒に無給で働きました。まだ、副業が認められるような時代ではありませんでしたから。

奥田　周囲の反応はどうでしたか。

中瀬　職場の先輩に「どうせ失敗して、1年後に派遣社員として戻ってくるよ」と言われたんです。

奥田　それはずいぶんな物言いですね。

中瀬　「上等だ！」と思いました。まだ25歳でしたし、それは何の傷にもならないし、自分にとっての大きなチャンスだと、勢いづいていましたね。

奥田　後半では、起業後のお話をじっくりうかがいたいと思います。　（つづく）

BCNは「ものづくりの環」を支え
育むメディア企業です



「ものづくりの環」の詩

ものを使う人がいます
ものを売る人がいます
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます
その意（おもい）が新しいものを生みます

使う人、売る人、つくる人――
私たちは「ものづくりの環」のなかで
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN
http://www.bcn.co.jp/